

# The Tokyo Tanuki Times

東京タヌキタイムズ

2016年11月号 通巻95号 毎月1日発行 購読無料

©MIYAMOTO Takumi,2016

責任編集：宮本拓海 発行：東京タヌキ探検隊！tokyotanuki.jp

## 続・タヌキの巨大なアレの正体は？

それは科学的根拠なく広まっていった…



あれ？ 君はオスかい？

(2009年9月撮影、文京区)

タヌキの性別が判別できる機会は非常に少ない。

なので今回は写真も1枚だけ。

お母さんは乳首が見えるので判別は簡単。

さて、2016年3月号「タヌキの巨大な陰囊(以下「アレ」と表記)」の続きの話です。うっかり忘れるところでしたが年内に片づけとしましよう。タヌキの伝承については書籍「狸とその世界」(著：中村禎里、1990年)に詳しく、今回は同書を参考にしています。

### アレ拡散は18世紀

バンクロフト糸状虫症による巨大なアレは昔は時々見られた人間の病気だったのですが、18世紀後半に特に話題になりました。中でも戸塚にいた乞食は有名だったようです。この頃には巨大なアレとタヌキとを結びつける表現は存在していたようで、この時代に世間に広く知れ渡ることになったのだらうと思われま

す。そんな連想をさらに押し進めたのが有名な浮世絵師、歌川国芳(1798～1861年)です。国芳の作品の中には巨大なアレを持つタヌキの絵がいくつもあります。それらの絵はお下品すぎてここでは掲載できませんが、

タヌキのアレが網代わりになったり、船になったり、看板になったり、布団になったり…、と奇想天外なことになってしまっています。

なぜこんな滑稽なことになってしまったのでしょうか。それを知るには当時のアレについての知識のことも知っておかなければなりません。当時の医学ではアレは何のためのものなのかまったくわかっていなかったのです。精液は腎臓で作られると考えられていました。アレは「無意味な存在」の象徴だったのです。

一方、タヌキという動物もこれといって特徴のある動物ではありません。美しい外見でもなく特殊能力があるわけでもありません。何かに役立つような動物とは当時も思われていなかったでしょう。

役に立たないタヌキの役に立たないアレ。国芳の絵ではそれが立派に役に立っています。役に立たずが役に立つ、という矛盾が当時の人々には大受けだったのかもしれませんが。

タヌキの巨大なアレについては、金箔を作る時にタヌキの皮を利用し

たことと結びつける説が流布していますが、それはちょっと根拠が薄いように私には思われます。

### 200年超の呪縛

このように見てくると、タヌキと巨大なアレの間には現実的な関係はまったくないことがわかります。ちょっとしたしやれのはずだったのが200年以上に渡って延々とネタにされ続けてきたのです。そろそろこの呪縛から解放してもいい頃合いではないでしょうか。ただ、解放を成功させるには信楽焼のタヌキ像という巨大な壁を何とかせねばなりません。人々の頭の中に染みついた記憶を改変するのは易しくはありません。

## スポンサー枠

スポンサー募集中です！

全国のタヌキ、ハクビシンなどの情報を集めています。

<http://tokyotanuki.jp>